

2021 年度 建設コンサルタンツ協会 学生懸賞論文

テーマ1「あなたが市長なら、どのような“まちづくり”をしたいですか？」

近江八幡でっちまちづくり計画 —ふるさと原体験の再生—

谷川 陸

京都大学大学院 工学研究科

1. はじめに

日本は GDP 世界第 3 位の経済大国とも言われるが、一人当たり GDP の値をみると 23 位に順位を落とす¹⁾。また、少子高齢化や賃金所得の低下が進み、日本経済の衰退を嘆く声も少なくない。しかし、こうした経済指標だけでは国民の豊かさは測ることはできない。このような状況下でも、一人ひとりが豊かに暮らしていくにはどうすればよいのだろうか。

新型コロナウイルスの感染が猛威をふるい、東京・大阪など人口密度の高い大都市のリスクの高さが認識されるようになった。それまでは、都市の魅力を求める若い世代が地方から都市へと流入していたが、企業のテレワークの導入など「ニューノーマル」と呼ばれる新しい生活様式や働き方が定着しつつある²⁾。このような大きな社会変化は、私たちがこれまで信じていた「当たり前」を奪い去り、私たちに自身を取り巻く環境について再考する機会を与えてくれる。

私は大阪の富田林市という田舎のまちで育った。思い起こせば、とにかく体を動かすのが好きで、学校のグラウンドで友達と遊んだり、親と川で釣りをしたり、迷路のようなまちなかを巡って自分だけの地図をつくったりした。こうしたふるさとの記憶がまちへの愛着を生み、実家に帰れば、少しずつ姿を変えていくまちを歩いて、個人的な記憶とのつながりをたどって魅力を再発見することができる。まちは生きている、と感じる瞬間である。知的好奇心をゆさぶる新しい出会い、非日常的な景色・眺め、地域固有の歴史・文化の深み、安心できる自分の居場所、、、そうしたふるさとの“原体験”を通して、地域の生活文化に触れることで、自分もまちの一部になったような気がする。ふるさとは、そこに暮らした人々のアイデンティティが蓄積されているのである。高度経済成長の遺産として画一的な都市が広がった現代において、地域のアイデンティティ、シビックプライドを取り戻すためには、“ふるさと原体験”の再生が重要であると考えた。

2. 箱モノをつくらないまちづくり

これまで都市は、舟運から電車、自動車へと交通の需要が変わるにつれて、その姿を変えてきた。例えば、京都では、明治維新による東京遷都により低迷していた旧都に活力を取り戻すため、舟運・発電・灌漑などを目的とした琵琶湖疏水がつくられた。自動車や鉄道などの急速な発展に伴い、舟運は徐々に衰退していったが、近年、観光船「琵琶湖疏水船」として復活し、新たな魅力を都市に与えている。また、山麓部には、疏水の水を利用した庭園群が形成され、今もそのいくつかが観光の名所として利用されている。社会の変化に応じて姿を変えながらも、歴史や文化が継承された取組みといえるだろう。

近年は市民参加型まちづくりが各地で行われ、完成した箱モノを提供するのではなく、未完成な状態から官民連携で一緒につくりあげることが持続性を保つ上で重要であると考えられる³⁾。また、こうした多様なニーズに対応して、既存の公共空間の役割が見直されつつある⁴⁾。たとえば、プレイスメイキングやシェアードスペースの導入などにより道路空間の再配分が国内外で急速に進められ、それに伴って、スローモビリティやシェアサービスといった新たな技術の導入が模索されている⁵⁾。水辺空間では、地域の賑わい創出を目指す「かわまちづくり」の取組の

なかで、民間業者等への河川敷地のオープン化が進んでいる⁹⁾。

現代はモノではなく情報が価値となった。車社会は子供から遊ぶ場所を奪ったが、この情報化社会のなかで発展した技術は子供たちからふるさとを体感する機会をも奪おうとしている。こうした技術のある程度受容しながら、ふるさとの価値を守り、原体験を育む“まちづくり”を本稿の提案の目的とする。

本稿では滋賀県の琵琶湖東岸に位置する近江八幡市旧市街地エリアを対象地とする（図-1）。近江八幡は豊臣秀次の城下町として栄え、近江商人発祥の地の一つとしても知られる。ラムサール条約の登録湿地である西の湖と八幡堀・長命寺川は「近江八幡の水郷」として全国第1号の文化的景観の選定を受けており、八幡堀周辺を含む旧城下町は、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。豊かな自然環境に囲まれ、歴史的・文化的な遺産が多く残存していることが近江八幡の魅力である。昭和後期にかけて、八幡堀は、琵琶湖の水位低下、化学肥料や生活排水の流入によりヘドロが堆積し、埋立てによる駐車場や道路の整備が考案されたが、近江八幡青年会議所を中心に反対運動が行われ、浚渫工事へと方針を変更して現在の景観が形成された。最近では、「るろうに剣心」や「大奥」など多くの映画・時代劇の撮影地にもなっている。

3. 近江八幡の課題と資源

近江八幡は人口8万2千人（2018.12 末時点）で、少子高齢化による活性力低下や、空き家・駐車場増加による町並みの破壊が問題として挙げられる。平成30年度の観光地来訪者数⁷⁾をみると、滋賀県内観光客数 No.1 を誇るラコリーナ近江八幡に年間300万人の入場客が集中しているが、次点で神社仏閣関係、八幡堀界限施設となっており、ラコリーナ近江八幡に近接する八幡堀周辺への波及効果を高めていくことで、地域の観光消費を高めていくことができると考えられる。令和元年度の「近江八幡市観光動態調査」によれば、市内の交通手段は自家用車が約67%を占め、日帰り客が約67%（平均宿泊数1.31泊、平均滞在時間3.9時間）と自家用車・日帰り利用者が多い現状にある。また、同調査によれば、自然環境や歴史・文化資源への満足度が高い一方で、観光情報の発信力の強化や民間活力を活かしたまちづくりが求められている。

以上の点から、近江八幡旧市街地のまちづくりの方針として以下の4点を挙げる。

- ①発信する…ウェブメディアを活用した観光情報の発信
- ②稼ぐ…民間活力を活かした観光ブランディングの実施
- ③学ぶ…歴史・文化を活かした学習プログラムの整備
- ④体験する…まち歩きと発表の場づくり

以上の方針のもと、住民組織・地元企業を中心とする協議会、協議会と連携・協働する企業連合体、専門家として助言を行う大学によるプラットフォーム「近江八幡ふるさとラボ」（通称：はちまんラボ）を整備する。そして、戦国時代の



図-1 近江八幡旧市街地エリア

歴史遺産や近江八幡の生活文化をPRし、「ふるさと原体験」を体験する“でっち”（丁稚）を育てる「近江八幡でっちまちづくり計画」を目標とし、実行することが望ましいと考える。

4. 近江八幡でっちまちづくり計画

“でっち”から八幡商人へ

はじめに、「はちまんラボ」がプラットフォームを構築し、ウェブサイトを整備する。ウェブサイトでは、まちが3D都市モデルとしてヴァーチャルに再現され、近江八幡で行われているプロジェクトや観光名所、まち歩きプランなどがひと目でわかるようになっている⁸⁾（図-2）。近江八幡に観光に訪れた人のうち、まちづくり活動に参加してくれる人を「でっち」として認定する。でっち（丁稚）は近江商人・職人に仕える少年を意味する言葉であるが、ここでは近江八幡のまちに奉仕する人を指す。「でっち」がはちまんラボで認定したプログラムに参加すると、「でっちマイレージ」が貯まる。マイレージは、社会実験プログラムなどにお客さんとして参加したり、体験プログラムに応援・寄付するなどの公的活動に参加したりすることで貯めることができる。マイレージが貯まると丁稚から、手代、番頭、近江商人へと昇格していき、各種限定のプログラムに参加できるようになるという仕組みである。まちを歩いたり、郷土料理を食べたり、祭りに参加したり、ふるさとを五感で体験することがまちづくり活動であることを実感してもらうことができる。

まちづくり計画のプロセスを表-1に示す。第1段階では、ウェブサイトを整備し、未利用地（市所有地）でのマルシェイベントや歴史・文化学習、自然体験プログラムの社会実験を行う。第2段階では、地域独自のSNSを構築して地域おこし協力隊などがインフルエンサーとなり発信を広げていく。また、マルシェイベントでできた地元協議会を中心として、歴史文化学習プログラムや自然体験プログラムを整備して「近江商人プロジェクト」としてまとめる。そして第3段階では、プロジェクトをメディア化し、雑誌や動画として発信する。このプロセスをひとつの祭りとして「はちまんPR映画祭」を開催し、これをもとに企業の誘致・連携を図る。

近江商人プロジェクト「はちまんPR映画祭」

地元住民と観光客（ボランティア・エキストラ）で数年かけて短編映画をつくり、その映画を公開する二日間の祭りとして「はちまんPR映画祭」を開催する。例えば、戦国時代から現代にタイムスリップしてきた偉人が、プログラム体験を通してまちに奉公していく中で、丁稚から八幡商人へと成長していく物語を映像化し、完成した短編映画をプログラムのPR動画として活用することなどが考えられる。

表-1 近江八幡でっちまちづくり計画のプロセス

	第1段階（1-2年）	第2段階（3-4年）	第3段階（5年-）
発信する	ウェブサイトの整備	地域SNS（ふるさとグラム）	メディア化（雑誌・動画）
稼ぐ	未利用地マルシェイベント	近江商人プロジェクト	企業を誘致・連携
学ぶ	社会実験イベント	はちまんPR映画祭	歴史文化学習プログラム開発
体験する	社会実験イベント	はちまんPR映画祭	自然体験プログラム開発



図-2 ポータルサイトのイメージ

以下に，プロジェクトの一案を示す。（以下の案は筆者が，実際の事業者を想定して作成したものである。）

【1-2 年目】スタートアッププロジェクト

○「夢を語る書き初め決起集会」

まちづくり有志者（市役所，大学，事業者など）を集めて，今後のまちづくりのあり方について個人の思いを語る．地元の書道家とコラボして，地域のコンセプトとそれぞれの思いを書き初めするイベントを開催する．その様子を既存の SNS で発信し，地元事業者の体験プログラムの予約チケット販売につなげる．

○「まちづくりサロン」

地方でまちづくり活動を行う人たちを読んで勉強会を開催すると同時に，実施に向けたスキームづくりを行う．酒造を活用した映画鑑賞会などのイベントを開催し，イベントには観光客も参加できるようにする．勉強会の後は，地元のクラフトビール店や，飲食店の料理などを持ち寄って打ち上げを開催し，地元のつながりをより強固なものにしていく．

【3-4 年目】はちまん PR 映画祭 第一弾「八幡堀映画祭」

PR のためのポータルサイトを立ち上げ，市の各部局と連携して占用を行い，八幡堀で 2 日間の野外映画祭を開催する．作成した短編 PR 映画と近江八幡に関わる映画を八幡堀で野外上映すると同時に，自然体験プログラムの社会実験を開催する（八幡堀ライトアップ，カヌー・SUP 教室，キャンプなど）．また，企業向けのツアー

として、地元割烹で料理を提供し、町家宿泊体験を実施する。

【5年-】プログラム・ツアー開発

自分だけの映画ができる、戦国武将になりきる観光ツアーなど、新たなツアー開発を行う。ロケーションオフィス等と連携してロケ地を巡るツアーを開催し、製作関係者による裏話や地元の歴史に詳しい語り部によるまち歩きを開催する。市所有のヴォーリズ建築や古民家などをコワーキングスペースかつホテルとして活用し、映画研究会・若手 web デザイナーに運営を依頼して、制作拠点として併用する。

制作拠点の映像制作誘致活動として、ロケ適地の紹介や地域の情報をオフィスニュースとして発行する。また、現地案内やエキストラの派遣、宿泊施設等の紹介などを通して協賛企業を募集する。自分たちでも映像作品を作成して発信し、近江八幡の観光振興を図る。映画作りを体験できるワークショップやプロによる技術講習会、PR 動画制作コンテストなど、新しいプログラムを整備する。

5. 事業の展開、効果・影響

以上のように、地元主体の小さな取組みからまちづくり活動を広げて、地域の理解を得てはじめて公共事業に展開することができる。地域住民から古写真を集めて、古き町並みを再現した水路の復元や古民家改修など、一つのコンセプトに基づいて公共事業を行うことも考えられる。また、映画制作スタッフとして、京都・大阪の若手クリエイターやロケーションオフィスなどと連携し、活動拠点として市所有の施設を提供することで、既存の文化施設を地域貢献のために活用することができる。既存の地域活動から体験プログラムを整備することにより、地域貢献活動へのやりがいを創出することができる。今までは、ボランティアで行っていた地域活動に社会的価値が認められ、地域が稼ぐ力をつけられるようになれば、競争力・発信力が生まれると考えられる。また、企業版ふるさと納税（地方創生応援税制）などの国の制度を活用し、地域外の企業からも援助を受けることができれば、企業にも地域貢献やPR のメリットが認められるだろう。

6. おわりに

大学では、景観をテーマに豊かな歴史・文化を持つ地域の人々にヒアリングをする機会があった。また、近くを訪れた際には、お店に立ち寄って話を聞いたり、進んでまち歩きをするようになった。今回対象とした近江八幡も研究や研究室のプロジェクトで関わった地域で、何度もまち歩きをして事業者の方々にヒアリングを行った場所である。

自分が市長としてまちづくりを行うと考えると責任に押しつぶされそうな気持ちになるが、誰かのふるさとを守るためにと考えると、どこかから力が湧いてくる感覚を覚えた。自分の技術や能力はまだ未熟であるが、未熟であるからこそ、一步一步前に進むことができる。今後は、まちづくりに関わる一人の人間として、地域に貢献できるように日々精進していきたい。

このような機会を与えていただいた建設コンサルタンツ協会の方々に、敬意と感謝の意を表して結びとする。

参考文献

- ¹ INTERNATIONAL MONETARY FUND : World Economic Outlook (April 2021) “GDP per capita, current prices”.
- ² 藤波匠：アフターコロナを見据えた地方創生のあるべき姿—ニューノーマルを地方創生の追い風にするために—, JRI レビュー, Vol.11, No.83, 2020.11.
- ³ 茶谷幸治：まち歩きが観光を変える 長崎さるく博プロデューサー・ノート, 学芸出版社, 2008.
- ⁴ 山口敬太, 福島秀哉, 西村亮彦：まちを再生する公共デザイン インフラ・景観・地域戦略をつなぐ思考と実践, 学芸出版, 2019.
- ⁵ 国土技術政策総合研究所資料「道路空間再編・利用事例集」, 国総研資料第 1029 号, No.1029, 2018.
- ⁶ 国土交通省水管理・国土保全局河川環境課「かわまちづくり計画策定の手引き」第 1 版, 2020.
- ⁷ 近江八幡市：令和元年版近江八幡市統計書
- ⁸ 国土交通省は 3D 都市モデル PLATEAU ver1.0 をリリースしており, 全国 56 都市の 3D 都市モデル整備が完了している. こうした技術を活用して近い未来, まちの状況を WEB 上で再現することができるようになると考えられる.